



TITLE:

<書評> 荒川正晴著『ユーラシアの  
交通・交易と唐帝國』

AUTHOR(S):

福島, 恵

---

CITATION:

福島, 恵. <書評> 荒川正晴著『ユーラシアの交通・交易と唐帝國』. 東  
洋史研究 2012, 70(4): 669-677

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/196931>

RIGHT:

## 書 評

荒川正晴著

## ユーラシアの交通・交易と唐帝國

福 島 恵

本書は、中央アジアの交通と交易の検討を中心に、遊牧民あるいは唐帝國とオアシス民との政治的統屬關係、そしてその關係のもとで形成される共生關係や地域秩序について記したものである。その視角は、各地域の歴史の流れを相互に連動するものとして捉え、ユーラシアというサイズで歴史をダイナミックにとらえるものである。このような見方は、著者が結語で記すように、これまで松田壽男にはじまり、その後岡田英弘・杉山正明・森安孝夫・妹尾達彦諸氏によって、いっそう磨き上げられてきた「五四九頁」。また、近年、出土史料の増加によって特に研究が進展した分野でもある。

著者の荒川正晴氏は、これまでこの分野の第一線で、特にトゥルファン文書を詳細に分析することによって、より實證的・具體的に研究を進めてきた。著者には、すでに多くの論考があり、單著としては『オアシス國家とキャラヴァン交易』もある。本書は、

その中でも主に交通と交易に關わる論考をまとめ直したもので、二〇〇八年に提出した博士論文がもととなっている。そのため、既發表の論文をそのまま掲載したものではなく、テーマに沿って新たに構成し直し、一部書き下ろしを加えたものとなっている。まず、本書の構成を記せば、以下のとおりである。

## 序言 本書の視角と課題

## 第Ⅰ部 トルコ系遊牧國家とオアシス國家

## 第1章 トルコ系遊牧國家の成立と交通システム

## 第2章 オアシス國家・遊牧國家とソグド人

## 第3章 オアシス國家の接待事業と財政基盤

## 第Ⅱ部 唐帝國とユーラシア東部の交通體制

## 第4章 唐代公用交通システムの構造

## 第5章 唐代河西以西の交通制度(1)

## 第6章 唐代河西以西の交通制度(2)

## 第Ⅲ部 唐帝國と胡漢商人の移動・交易

## 第7章 唐帝國と胡漢の商人

## 第8章 唐の通過公證制度と公・私用交通

## 第9章 唐の河西以西への軍物輸送と商人

## 第10章 唐の支配と交易・經濟環境の變動

## 結語

## あとがき

## 二

本書の内容を評者なりに整理しまとめれば、以下のとおりとな

る。

# 序言 本書の視角と課題

本書で対象とする時代・場所を述べ、その視角と課題を明確に提示した。それによれば、本書は、六～八世紀に活発化した中央アジア（バミールの東西の草原とオアシス地域）の交通・交易をユーラシア東部地域（バミール以東の中国・モンゴリアなど）の廣域的空間から捉え直し、その實相と隆盛の要因を明らかにするものである。六～八世紀は、ユーラシア東部地域にとって、トルコ系遊牧民族から唐帝國へとその支配が轉換した時期である。そこで、本書では、当該時期におけるオアシス國家とその周邊國家（具體的には西突厥・唐）との政治的統屬關係・共生關係・秩序形成を切り口とし、中央アジアの交通と交易を検討する。また、ここで特に注目する點としては、唐にとって、中央アジア地域の支配は、大きな人的・物的負擔であったことである。そこで「唐帝國は何故に大きな負擔を覺悟してまで中央アジアを支配しようとしたのか」、「中央アジアにおける遊牧民とオアシス民との共生關係は、唐帝國の支配下にかくに變化していったのか、唐帝國の支配は中央アジアの何を變えたのか」を本書における課題とした。

## 第Ⅰ部 トルコ系遊牧國家とオアシス國家

遊牧國家とそれに支配されるオアシス國家において、兩者の間にはいかなる共生關係が形成され、どのような交通・交易體制が構築されていたのかを考察した。なお、第Ⅰ部では、西突厥支配下の魏氏高昌國の事例を取り上げた。

「第Ⅰ章 トルコ系遊牧國家の成立と交通システム」では、まず、遊牧國家の可汗とオアシス國家の王との間の支配―從屬關係が「頡利發 II *Tiēbā*」の稱號の授受を通じて形成されていたことを確認し、トルコ系遊牧國家とオアシス國家との間には、雙方に利のある共生關係が構築されていたとする。遊牧國家がオアシス國家から得たものとしては、可汗に對する貢納の他に、ここでは特に「鄯落 II *ēnā*」に注目した。*ēnā*とは、直接的には可汗の使節に供出される驛傳馬あるいは驛傳用駄獸を意味するが、それには常に人（從者）が併せて提供されており、使節の遞送システムとして機能していたとする。これは魏氏高昌國の場合だけに見られるのではなく、可汗によって *Tiēbā* の稱號を授與された集團に共通すると想定され、こうして遊牧國家は、廣域の交通體制を構築することができたとした。一方、オアシス國家が遊牧國家から得たものとしては、可汗の權威のものと武力的な庇護の保證であったと指摘し、さらに、オアシス國家の使節も遊牧國家の築いた交通體制に乗り、移動範圍を広げることができたとした。

「第Ⅱ章 オアシス國家・遊牧國家とソグド人」は、前半では魏氏高昌國におけるソグド人について考察する。トゥルファンでは、五世紀にはソグド人聚落が存在し、魏氏高昌國時代になると「薩薄」がその聚落を統括していた。トゥルファン出土文書や墓表からソグド姓を持ち官職を得ていた者を抽出して分析すれば、特に史姓のソグド人が國王の側近官として重要なポストに就いており、ある者は高昌都城の市場の管理・徵税を行い、またある者は王の使いとして各地を往來していたとする。ここでは、ソグド人と當地の政治權力との密接な結びつきを指摘した。後半では、

魏氏高昌國における遊牧使節の性格とその待遇について分析した。遊牧國家の可汗およびその親族や屬官、他のオアシス國家、領地・領民の支配を認められたリーダーからなど、魏氏高昌國には多様な使節が數多く派遣され、その接遇にかかる供出負擔も相當なものであった。その使節の構成員を見てみれば、數多くのソグド人が使節の代表もしくは隨行人となっていた。ここから、使節派遣の目的は、オアシス國家が蓄える物品を徵發することだけではなく、交易が重要な目的の一つであったと指摘した。ソグド商人にとつて、遊牧國家およびオアシス國家の使節（＝キャラヴァン隊）は、安全に沙磧・草原を渡る機會を與えるものであり、一方、オアシス國家にとつて、使節（＝キャラヴァン隊）への應接は、義務であつたと同時に、商旅の利をもたすものであり、國家の存亡・盛衰に關わる重要な國家的事業となつていたとした。

「第3章 オアシス國家の接待事業と財政基盤」では、魏氏高昌國における使節應接の財政基盤である税・役について考察した。魏氏高昌國の課税役は、國家が管理する渠堰ごとに灌漑される田地をもとに作られたグループを單位とし、「税」としての田租・刺薪、「役」としての車牛の供出が課されていたのが特徴である。また、馬の供出は、個々の田地の所有總額に應じて課されていた。これらの課税役は、「官・僧・民」の區別なく田園を所有する（＝水利權を取得した）ものすべてに適用された。なお、隣接するオアシスへの運送などに利用された遠行馬・遠行車牛については、高昌國末期の延壽年間になると供出者の固定化・事從化が進んだことで、供出から銀錢による雇用へと變化が見られることを指摘した。また、トゥルファンの特産物である棉布は魏氏高昌國

に存在した廣大な「公田」で生産されており、その耕營は、特定の官員とその官員が率いるグループによって行われていたとした。魏氏高昌國に限らず、オアシスの住民が、遊牧集團などからの使節の受け入れのために多大な税・役負擔をするのは、オアシス國家あるいはその國王が、水利の管理・遊牧集團からの收奪の防御・使節（＝キャラヴァン隊）の誘致などにより、國に繁榮をもたらすためであるとし、當該地域での國家・集團レベルでの多様・多層な共生關係を描き出した。

## 第II部 唐帝國とユーラシア東部の交通體制

それまで西突厥が覇權を握っていた中央アジアに軍事進出した唐帝國が、その地にどのような交通システムを構築したのかについて考察した。

「第4章 唐代公用交通システムの構造」では、唐帝國內部の交通システムの根幹となる驛傳制度について、いかなる基本構造を持つものであったのかをまとめた。驛傳制度は、驛制と傳（送）制との二つから成る。驛制は、驛を據點に國都と羈縻・直轄州府とを驛道を通じて直結させ、緊急を要する情報の傳達や使者・商人の往來などの機能を擔った。それに對して、傳制は、諸縣を遞送據點とし、驛道に拘束されずに公用交通・運輸をより廣範に擔い、驛制を補う機能を果たしていたとする。また、すべての府州を結ぶとされる驛道は、唐皇帝への貢納の道、唐帝國的政治と軍事を支える幹線、さらには私的な交易活動をも支える道であったと指摘した。驛傳制は、あらゆるものを政治的中心地である國都の長安へと收斂し、同時に州府縣へと擴散させる機能を果

たしていたのである。

第5章・第6章では、七世紀中葉以降の唐帝國の中央アジア地域への進出により、いかなる交通體制が構築されたかについて、主にトゥルファンを中心とする天山東部地域を対象に考察する。

「第5章 唐代河西以西の交通制度（1）」では、唐の傳制から特別な展開を見せた西州（トゥルファン）の長行坊に注目した。唐の進出に伴って、中央アジア地域にも驛道が延び、驛傳制度が基本的には導入されたが、その運用は各地の事情に應じたものであった。河西の沙州敦煌縣では、交通手段の管理に特化した傳馬坊が設置された。一方、西州では、傳馬坊の代替として長行馬・長行車馬を管理・差配する長行坊・長行車坊が配備されていた。特に長行坊については、縣ではなく州府に配置される點で傳馬坊とは異なり、さらには鎮守軍の駐屯に應じて北庭都護府・安西都護府にも導入されたとする。また、七世紀中葉の驛制の導入によって、西州にも驛道・驛が設置されたが、軍事支配が強化された八世紀には撤廢され、長行坊による交通手段へと一元化され、その長行坊の管理・運営には、駐屯軍の將兵が深く關與するようになったことも指摘する。さらに、從來の驛道上には、館が軍事施設（鎮・戍）と併設される形で布置されたが、館を配置できない地域では軍事施設がこれを代替したとする。長行坊と長行車坊および館と軍事施設が連携して、駐留將兵・官人・客使などの往來を支える交通機關や據點として機能したのである。なお、八世紀以降、河西に置かれた傳馬坊は、長行坊に置き換えられ、長行坊體制が、西州・北庭地域だけではなく、廣く河西地域に擴大していたことも指摘している。

「第6章 唐代河西以西の交通制度（2）」は、中央アジアの遊牧部族・オアシス國家に設置された羈縻府・州による人畜の徵發が、どのようなものであったのかを検討した。中央アジアを貫く唐の驛道は、唐の天可汗のいる長安へと通ずる道として、現地では「漢道」と呼ばれた。こうした「漢道」を保持するため、羈縻府・州が設置されたオアシス國家や遊牧部族は、<sup>E</sup> 嚭<sup>レ</sup>としての人馬や糧食等の供出を行い、唐の交通運用を支えたことを指摘する。またその一方で、遊牧集團の首領にとつては、驛道上に設置された館は、派遣した進貢の使節が應接され、絹などの「賜」を確保できる場であると同時に、そこでは交易活動も行っていただろうとした。遊牧集團は、西突厥から唐へとその支配が變わっても、使節（<sup>II</sup> キアラヴァン隊）を設えてオアシス地帯へ派遣することを繼續していたのである。

### 第Ⅲ部 唐帝國と胡漢商人の移動・交易

唐帝國の中央アジア支配のもと、唐は驛道を往來した商人をいかに掌握・管理したのかについて、また、キアラヴァン交易は西突厥時代と比べてどのように變化したのかについて考察した。

「第7章 唐帝國と胡漢の商人」では、中央アジアに領土を擴大した唐が、唐の建國以前から「中國」内地でも交易活動をしてきたソグド人をどのように扱ったのかについて、整理・検討した。唐の建國後、それ以前から交易據點に設置されていたソグド人のコロニーも唐の支配下に置かれたが、ソグド人は他の漢人・遊牧民聚落と同様に、唐の州縣郷里體制に組み込まれ、「百姓」として扱われることとなった。彼らは、本貫とする州縣に定着し、自

由に移動することは基本的に認められなかった。また、唐のソグド人にはこの「百姓」とは別に、交易活動と密接に關わっていた「行客」・「興胡」と呼ばれる人々がいた。唐は、本貫地を離れて移動する合法的な流動的客籍民を「行客」とし、ソグディアナのオアシス諸國に置かれた唐の羈縻都督府・州を本貫としたソグド人で、唐の内地に新たに入境する者に「興胡」という肩書きを與えてその活動を容認した。唐は「行客」・「興胡」を、寄寓先の州縣に附籍し、税錢を納めさせ、過所の發給を通じてその交易活動を保證すると同時に、彼らの移動を管理・掌握したのである。

「第8章 唐の通過公證制度と公・私用交通」では、「過所」がいかなる通行證であるのかという問題を中心として、唐の通過公證體制について検討した。私用交通における通行證である「過所」は、發給官司の官轄領域を越える交通に發給され、廣域にわたる領内の通行を保證した。最終目的地までに途中通過する關津の指定はあるものの、到達期限を限定されることはないという時空的な融通性が高いもので、百姓でも散官など有位の者であれば、過所を獲得できたとする。一方、公的交通の通行證である「公驗（行牒）」は、發給官司の管轄領域に限定して遞送・供給を保證するものであり、州府がこれを發給する場合であれば、隣接する州府までの交通を一定の時間内に限定して許可するものであり、全くの白丁である百姓にも發給され、その發給のための審査は「過所」に比べると簡便であったとする。トゥルファン文書中には、この「過所」と「行牒」との二種類の通行證を持つ者が確認でき、「過所」に滞在先の州府の「行牒」を連ねることで、あえて幹線路（驛道）から外れて通行することが可能となり、柔軟な

往來を實現できたことを指摘した。

「第9章 唐の河西以西への軍物輸送と商人」では、中央アジア支配のために必要な軍事物資と商人との關係について述べた。七世紀末以降、河西を含める邊境地域に多くの軍鎮が常駐するようになり、八世紀にこれらを統括する節度使の體制が形成されていくと、河西地方や中央アジアへの軍事財政が肥大化した。この軍物として内地から定期的に補給されたのが、庸調として徴收される絹であった。中央アジアへ運ばれる絹は、一旦涼州に集められ、傳馬坊を連結する遞送體制によって、輸送を維持されていたが、中央アジアの軍物需要が急増する八世紀になると、河西管内および中央アジアへ送納される税物の運搬・輸送を統轄する長行使・轉運使（節度使が兼任）が設置され、その輸送に責任を負う運搬體制が補強された。この絹の輸送の一例を記せば以下のようであるとされる。節度使や各軍鎮は輸送責任官として「行綱」を派遣。行綱は涼州で客商を「駄主」として雇用し、その客商が行客や百姓を「作人」として雇い、そして編成した輸送隊（＝キャラヴァン隊）が行綱の輸送隊を名乗って驛道を往來していたのである。また、ペリオ三三八號紙背文書の分析を通して、唐内地から中央アジアに運ばれた庸調絹がどのように使われたのかについて記した。庸調絹は、穀物の買い上げ、すなわち交羅・和羅と呼ばれる羅買の資金として使用されていた。一般農民から時價で穀物を買ひ上げる和羅に對して、交羅とは、和羅の價格から一律一斗あたり五文安くして買ひ上げる羅買のことである。この羅買は、經濟的に優勢な地元の「行客」や有力「百姓」に依存して行われており、「行商」が客商として外から持ち込んだ安價な穀物

を買い上げている様子も見られた。すなわち、庸調絹の輸送、庸調絹による穀物の買い上げのいずれれもが「行客」・「百姓」に依存するかたちで行われていたのである。これら中央アジアの庸調絹は、官と客商らが持ちつ持たれつの表裏一體の関係を象徴するものであるとした。

「第10章 唐の支配と交易・經濟環境の變動」では、唐の支配が中央アジアに何をもたらしたのかについて検討した。唐は、中央アジアに軍物および交通關係經費として大量の庸調絹を輸送したが、それは、驛道（漢道）の維持や過所の發給などを通じて、唐による交通・交易の一元的な管理の上に展開されたものであった。中央アジアでは、そのような交通體制のもと、遠隔地交易が活發化した。それは「興胡」や「行客」だけでなく「百姓」であっても、官物の輸送や確保に關わる機會を得るか、別奏（軍鎮の高官に仕える従者）となるか、あるいは散官を有する身分となるかといった、いずれかによつて、安全かつ效率的な遠隔地貿易が保障されたためである。つまり、交易に従事したい者は、さまざまな方法・手段で過所を取得し、キャラヴァン隊を編成する機會を得ようとしたことを指摘した。また、このようなキャラヴァン隊によつて、大量に運ばれた庸調絹について、その種類とそれぞれの機能を分析した。特に注目したのは絹の中でも練を主體とする帛練である。帛練は、貨幣として當該地域で流通し、地域内の高額取引や對外（地域間）交易の決済手段として用いられていたことを明らかにした。中央アジアでは、八世紀以降、それまでの流通貨幣であった銀錢にかわつて帛練が主要貨幣となり、唐の通貨である銅錢とともに利用された。また、その後、唐の支配の終

焉とともに帛練の流通が消滅したことは、この帛練を主要貨幣とする現象が唐の支配による特殊なものであったことを物語るとしている。なお、この帛練は、中央アジアだけでなく唐の北・東北邊にも流入しており、生産地の中國北部・西南部を中心に、帛練を共通貨幣とする一大經濟圏が形成されていたことも指摘した。

#### 結語

各部で記した内容を簡潔にまとめ、序言で擧げた問題、すなわち「唐帝國は何故に中央アジアを大きな負擔を覺悟してまで支配しようとしたのか」「唐帝國の支配は中央アジアの何を變えたのか」についての結論を記した。前者については、これまで論じてきたことをもとに「北方游牧勢力やチベットと對峙する唐帝國の防衛上の意味とともに、中央アジアの交通と交易を管理することを通じて、ソグド人を唐の「内」に取り込むためであったとみられる「五四八頁」とした。また、後者の「唐帝國の支配は中央アジアの何を變えたのか」については、特に第Ⅱ・Ⅲ部で論じられたところであり、中央アジアにおける交通や交易が唐の管理下に置かれたこととする。その象徴としては、「驛道（漢道）」の敷設や百姓・行客・興胡といった身分肩書きによるヒトの掌握・管理、さらには過所や公驗などといった通行證の發給による通過公證體制の確立であった「五四四頁」と記す。

なお、「結語」のあとには、「あとがき」・「初出論文一覧」・「引用史料（漢籍）典據」・「引用文獻目錄」・「附圖」・「府州郡別編戸・絹供出一覽表」・「英文要旨」・「索引」などが掲載される。

また、各章には「はじめに」・「結論」が特に設けられていないが、各部に「小序」・「小結」が設けられ、問題の所在とまとめが記されている。

### 三

以上に見てきたように、本書は、出土文書史料（特にトゥルファン文書）の分析を柱とするが、その関係する研究分野は、交通史・水利史・社會經濟史など、非常に多岐にわたるものである。また、主に取り扱う時代や地域は、六～八世紀、ユーラシア東部地域であるが、その視野は、三・四世紀のユーラシア規模での大變動の時期から、一三世紀に成立するモンゴル帝國時代、さらには明・清時代までも見据えたもので、非常に廣範な研究である。これら点については、森部豊氏による書評・鈴木宏節氏の短評<sup>2)</sup>ですでに指摘されているところであり、そちらを参照いただきたい。また、本書の研究の柱である出土文書（その形式や内容など）の分析については、これまで数多くの緻密な研究がなされ、その研究蓄積が特に深い分野であるので、書評という形ではなく、個別の研究で言及されることが期待される。そこで、以下では、本書の考察において交通・交易の中心的な擔い手として位置付けられているソグド人に關連する部分について特に取り上げたい。

荒川氏の研究において、ソグド人は、遊牧國家・オアシス國家・中國（唐）のいずれにとっても、「商旅の利」という形で、國家に繁榮をもたらす存在として扱われており、各國が彼らソグド商人をいかに招致し、取り込んでいったかが本書の重要なポイントとなっていると言えるだろう。その事例をあげれば、唐の支

配以前の中央アジアにおいては、遊牧國家からオアシスへの使節の實態がソグド商人を中心とするキャラヴァン隊であったことであり、その使節を迎えるためにオアシスの民が課税役に應じていたことである。唐の支配下においては、ソグド人は「百姓」・「行客」・「興胡」など彼らの活動形態に應じて様々な肩書きが附與され、管理されたことである。その中でも特に注目されるのはソグディアナを本貫とし、唐内地に入ってきた外來ソグド商人の「興胡」の存在であり、彼らは、通行證「過所」の發給を受け、驛道（漢道）を通じて、國都へ誘導された。こうして唐は、西方世界からのヒト・モノ・文化・情報を國都に集中させたのである。また、唐は八世紀以降の中央アジアへの進出とその經營に伴って、大量の軍需物資（特に庸調絹）を現地に輸送する必要があったが、その輸送を實際に支えていたのがソグド人を含むキャラヴァン隊であったことも彼らの重要性を示す事例としてあげられる。ソグド人の活動は、遊牧國家・オアシス國家・中國（唐）にとつて國家の存亡・盛衰を左右する重要なものであった。

ソグド人の側から言えば、彼らは、遊牧國家・オアシス國家・中國（唐）のいずれの支配であつても、柔軟に對應して、交易活動を繼續していたこととなる。唐の支配以前は、遊牧集團からオアシスへの使節（「キャラヴァン隊」）に依存して自らの交易ネットワークを強化し、唐の支配下では、唐に與えられた様々な肩書きのもと、その立場に應じて獲得できる通行證を利用しながらキャラヴァン交易を繼續していたことになろう。ソグド人の活動を通して、ここに遊牧國家・オアシス國家・中國（唐）における多様・多層な共生關係が見えるのである。



荒川氏は、序言で「ソグド人の存在に象徴されるように、中央アジアを捉えようとするにあたり、中央アジアの内部の遊牧民とオアシス民だけではなく、その外部にいたる廣域世界を視野に入れて検討するのは自明の理であろう〔四一五頁〕」とする。この荒川氏の言葉にあるように、廣域に活躍するソグド人の重要性はこれまで理解されてきたものの、實際に彼らの活動の様相を解明することは、史料的な制約もあって、困難な状況であった。しかしながら、本書では、出土文書史料を駆使することで、彼らの交易活動の實態を生き生きと、そして非常に具體的に復元させることに成功したのである。まさに彼らソグド人の重要性を體現したと言えるであろう。

上記の研究成果を念頭に、近年のソグド研究の成果と照らし合わせれば、新たな問題點も浮かび上がってくる。近年、固原の史氏一族墓や西安の安伽墓・史君墓・康業墓などが發見・發掘され、ソグド人に關する史資料が著しく増加した。その中でも歴史學分野では、特に墓誌史料が注目を集めており、その數は現在も漸次増加している。墓誌は、主に官職を有した者がその顯彰のために作成するものであるという性格上、そこには商業活動をする姿はほとんど見られず、むしろ武人として中華王朝に仕える様子が記されている。これらの墓誌史料を利用して、山下將司氏は、ソグド人がその聚落の民を率いて北朝末から唐初に軍事活動に参加するといった武人化したソグド人の存在を指摘し、また、森部豊氏は、騎馬や弓を射るといった突厥の文化を身につけたソグド人（Ⅱソグド系突厥）が安史の亂前後から五代にかけて活躍する様子を明らかにしている。しかし、本書で示されたように、トゥル

ファンなどの出土文書史料では、主に商人としてソグド人が活動する姿が見られ、その點が墓誌史料からみたソグド人の姿と異なっているのである。そうすると、墓誌史料に見られるような武人化したソグド人と、本書で示されたような商人としてのソグド人との關係がどのようなものであったのかという、新たな疑問が浮かび上がってくるのである。

この問題を解明するために本書で最も示唆深いのが、次にあげる魏氏高昌國におけるソグド人の官職についての指摘である。魏氏高昌國のソグド人の中でも史姓と康姓とは、官人として果たしていた役割に明確な相違があったとする。具體的には、史姓のソグド人は魏氏高昌國の尙書系・門下系の重要なポストを占めており、それに對して康姓のソグド人（彼らの名は「ソグド人風」の者が多かった）は武官職で武力の一端を擔っていたとする「五五頁」。これについて、森部氏は書評の中で、「高昌國において康姓のソグド人が武官職についていた事實は、彼らがソグディアナ本土においても軍人であり、その軍事面での能力を生かして高昌國に仕えた可能性が高いのではないか。そう考えると、高昌國より東方の河西や固原、さらには長安で軍人として活躍したソグド系武人も、これに連なるソグディアナにおける一種のソグド軍人との關係に注意する必要があるだろう」と指摘している。つまり、ソグド商人だけではなく、ソグド軍人がソグディアナからユーラシア東部のオアシス・中國・モンゴル地域に及んでいた可能性もあることとなる。また、本書で指摘された以下の事例も參考になるであろう。外來ソグド商人である「興胡」が唐に入境する際、過所を申請するのに身元を保證する「保人」が必要であっ

だが、その保人には唐の「百姓」としてオアシスに定住するソグド人が名を連ねており、その背景にはソグド人の強力なコネクションがあったとする「三五七―三五八頁」。ここから、ソグド人のネットワークが、國家や支配する民族にかかわらずに張り巡らされていたことが想像でき、ソグド商人と武人化したソグド人との間には何らかの連携関係が想定できるであろう。今後の出土史料の増加と研究の進展が待たれるところである。

以上、本書の内容を紹介し、評者の關心に基づいて、氣が附いた點について述べてきた。先述したように、本書が取り上げる内容は、トゥルファン文書の分析や本書評で特に取り上げたソグド人の活動についてだけに止まるものではなく、非常に廣範な研究分野に關連するものである。今後、本書で提示された多くの成果をふまえ、さらなる實證的な研究が行われることが期待される。

なお、評者の力不足のため、本書の廣範な内容に對して精確な理解が及ばず、あるいは本書の紹介も著者の意圖を十分に表現できていないのではないかとおそれている。最後にこの點をお詫びし、著者ならびに讀者の海容を乞う次第である。

## 註

- (1) 荒川正晴『オアシス國家とキャラヴァン交易』(世界史リブレット六二)、山川出版社、二〇〇三年二月。  
 (2) 森部豊「書評・新刊紹介 荒川正晴著『ユーラシアの交

通・交易と唐帝國』(『唐代史研究』一四、二〇一一年八月、一〇九―一一六頁)。

- (3) 鈴木宏節「回顧・展望 内陸アジア一」(『史學雜誌』第二二〇輯第五號、二〇一一年、二五六頁)

- (4) 山下將司「新出土史料より見た北朝末・唐初開ソグド人の存在形態―固原出土史氏墓誌を中心に」(『唐代史研究』七、二〇〇四)、山下將司「隋・唐初の河西ソグド人軍團―天理圖書館藏『文館詞林』「安修仁墓碑銘」殘卷をめぐる―」(『東方學』一一〇、二〇〇五)、山下將司「唐のテュルク人蕃兵」(『歴史學研究』八八一、二〇一一、一一―一一頁)。

- (5) 森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』(關西大學出版部、二〇一〇)。なお、中田裕子氏はソグド人との混血が進んだ突厥人の存在を指摘し、森部氏と同様に「ソグド系突厥」と名附けているが、その定義は森部氏と異なっている(中田裕子「唐代六胡州におけるソグド系突厥」(『東洋史苑』七二、二〇〇九)参照)。

- (6) 前掲注(2)、森部豊「書評・新刊紹介 荒川正晴著『ユーラシアの交通・交易と唐帝國』」一一五頁。

二〇一〇年二月 名古屋 名古屋大學出版會  
 A五版 v+六三〇頁 九五〇〇圓